

第三章 災 害

徳川幕府のとつた参覲交代の制度は諸藩の財政を苦しめたが土佐藩では野中兼山出で大いに開拓を進めたに拘らずその財政が苦しくなつて来たが、その原因は参勤交代の他にもあった。それは毎年襲い来る風水害、それに旱魃、地震、火災等の災害がそれである。こうして庶民の生活が苦しくなり政治への不信がでてくることによつて漸く封建政治に末期的徴候が表われ始めるのである。今本村に関係するものを挙げると、

正徳二年（一七一二）高知下知の潮留堤がきれ、その普請が行なわれているが、この時高岡西郡に三五、一一九人歩役の夫が割当てとなり、本村には船戸村五一〇・三人、芳生野村三九一・八人、北川村四六八・四人計一、三七〇・五人役が割付けられている。

享保十二年（一七二七）に高知城火災、この再建にも汐留堤普請の比でなく出夫が要請されたであろうがその記録は見当らない。

寛保二年（一七四二）十一月二十六日熊野神社火災、宝暦十三年（一七六三）龍泉庵火災、安永三年（一七七四）十二月三日芳生野土居長山家火災と記録に残っているものは少いが、当時は木造草屋根に照明は松火、提灯等であったので屢々火災が起った。然し未だ人家が密集してなかったので一戸か、二戸位焼けただけですんだので記録にないものを入れるとどの位になるか分らない。

郷内「おいせおまつ」の哀話もまた火災を起し易い生活様式の犠牲ともいえよう。

寛政元年（一七八九）寛政十一年（一七九九）享和元年（一八〇一）天保三年（一八三二）に旱魃があり特に天保三年には八十四日一滴の雨も降らず農作物は枯死して了った。翌天保四年（一八三三）にはバッタの大群が襲来し稲作皆無となり、翌々天保五年（一八三四）これ又大洪水に見舞われて困窮飢饉は続いた。

その後安政元年（一八五四）大地震七日七夜の間天地震動し多大の損害を与えた。記録には風水害については宝暦七年善之進打首の前後二回の風水害と天保五年前述の大洪水しか見られないが、毎年襲来する颱風はもう例年のことと云うので記録しなかったであろう。毎年風水害のあったことは善之進の命日附近には必ず襲ってくる風を善之進風と言って恐れたという口碑でも分るのである。（その後調査判明したものを年表に入れておいたので参照のこと）